

# 吉満義彦における歴史的哲学的省察

－「マリタン先生への手紙」をもとにして－

佐々木 亘\*, 佐々木恵子\*\*

A Historical and Philosophical Reflection on Yoshimitu Yoshihiko

－Based on a letter to Professor Maritain－

Wataru Sasaki\* and Keiko Sasaki\*\*

---

吉満の人生は、日本が近代化を進め、工業技術発達、科学の進歩のなかで、大衆文化が花開きラジオ、映画などの登場でメディアも大きく変化した時代であった。しかし、その一方で近代化の矛盾が立ち現われ、国内ではさまざまな社会問題が起り、世界恐慌、資本主義と共産主義の拮抗、帝国主義のもと列強諸国の覇権争いの大波の中で、日本は大東亜共栄圏構想へと流れ込んでいった。戦争は地域紛争ではなく世界的規模に広まり、その戦争の悲惨な内容は大量破壊兵器による殺戮と変わった。カトリック神学者であった吉満にとって現実世界の政治哲学的なかわりほどのようなものであったのだろうか。その思想を吉満の師であるジャック・マリタンへの手紙をもとに考察していきたい。また、現代社会において近代化の矛盾は解決したのだろうか。吉満の生きた時代と現代のわれわれが生きた時代に類似点や同様の問題があるのではと考える。超自然的な恩恵の世界を背景に持つ吉満をキリスト教信者の枠で狭めることなく、その思想を見ていきたい。

Key Words: [吉満義彦] [ジャック・マリタン] [近代化] [恩恵] [霊性の秩序]

(Received October 24, 2023)

## はじめに：吉満義彦とその時代

吉満義彦の経歴とその時代をまず捉えていきたい。吉満は1904（明治37）年鹿児島県徳之島に生まれる。そこは南海の孤島であり、少年時代、果てしない水平線の彼方を、憧憬と不安の心で打ちまもりつつ「海に向かって」濤と語り風と嘯いて育ったという<sup>(1)</sup>。1917（大正6）年吉満は島をあとにして鹿児島市内の鹿児島県立第一中学校に入学、1922（大正11）年第一高等学校に進学し東京に出ている。1925（大正14）年東京帝国大学文学部倫理学科に入学。一高時代には内村鑑三の聖書研究会に入っていたが、岩下壮一に出会いから感化され、1927（昭和2）年カトリックに改宗する。1928（昭和3）年大学卒業後、春にフランスへ留学、ジャック・マリタンに師事し、1930（昭和5）年帰国。その後上智大学、東京公教神学校で哲学を講じ、東

---

\* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

\*\* 神戸大学修士（経済学）

京帝大倫理学科で講師。また学生宿舍「聖フィリッポ寮」の寮監も務めている。キリスト教神学者、哲学者として生涯研究、教育に携わり、1945（昭和20）年に病に倒れ死去する<sup>(2)</sup>。

吉満が誕生した1904年は日露戦争が始まり、没年は第2次世界大戦が終結した年である。往年の吉満は大学に向かう途中、トマス・アクィナスの『スンマ・テオロジカ』を抱え、街中に響きわたる軍艦マーチのリズムに足を合わせられそうになるのを困りながら街を歩いていたという<sup>(3)</sup>。吉満の人生は、近代化のなかでさまざまな紛争や大きな戦争の繰り返される時代、戦禍の中にあった。吉満が第一中学校入学した年に、ロシアでソビエト政権（10月革命）が成立する。翌年第一次世界大戦が終結。第一高等学校入学の翌年1923（大正12）年関東大震災。帝国大学入学の1925年は治安維持法、男子の普通選挙法が公布されている。フランス留学期は、1928年パリ不戦条約、1929年は世界恐慌が起これり、1930年ロンドン海軍軍縮会議が開かれている。

1930年に吉満は帰国しているが、その翌年1931年柳条湖事件、その後満州事変へと進み、国際連盟脱退、2.26事件などさまざまな歴史の大波のなか、1937（昭和12）年には日中戦争へと突入し、1941年（昭和16）真珠湾攻撃より太平洋戦争が始まった。吉満の師であった岩下壮一はこの前年に亡くなっている。

日本は大東亜共栄圏を掲げ聖戦として戦争が進められていくのであるが、祖国日本と自らのキリスト者として、そして帝国主義、ナチズム、ファシズム、スターリニズムのなかで、吉満はどのような立ち位置でいたのであろうか。また、吉満の青春時代は大正デモクラシーにかかる。ベルグソンの「エラン・ヴィタール」はもとより、生命主義が多彩に展開して思想、文化、芸術など広く人々に影響を与えた<sup>(4)</sup>。その一方、経済不況、社会争議、女性解放運動などがおこり、また、スペイン風邪が猛威をふるった時代でもあった。吉満の生きた時代は工業化だけではなくメディアも発展する。ラジオ放送の開始、新聞や書籍、雑誌の出版により大衆に教養を広め、書籍を通じた読者とのネットワークの利用、その影響力も広がっている<sup>(5)</sup>。吉満も1934（昭和9）年、弟の義敏らと雑誌『創造』の刊行をはじめている。

吉満の師であるジャック・マリタンの著作『全きヒューマニズム』を吉満はその出版2年後に紹介しているが（「ジャック・マリタン－特に文化哲学のために」『伝統主義・絶対主義』河出書房）、humanisme intégralの概念に「充足的ヒューマニズム」という訳語で理念的側面が記され、その具体的な歴史的理想的部分で紹介されていない<sup>(6)</sup>。たしかにキリスト教神秘主義を説く吉満の印象は、人間の社会的な現実に向かうものではなく、人間本性の霊的な救いを中心にあつかう激動の時代を生きた一人の学者、敬虔なキリスト信者、詩的な哲学者と想像するは容易なことであろう。しかし、吉満の現実社会における政治への対応を半澤孝麿は「政治への非政治的対応」が吉満の吉満たる所以であると、これを高く評価している<sup>(7)</sup>。吉満の歴史哲学的考察を、1938（昭和13）年12月に『創造』に寄稿した「マリタン先生への手紙－現代の歴史哲学的省察－」をもとに明らかにしていきたいと思う。これが出版された年の4月に国家総動員法が公布されている。

## I. 「マリタン先生への手紙」

この「マリタン先生への手紙－現代の歴史哲学的省察－」は、実際にジャック・マリタンに出された手紙ではなく、「書簡の形式をもって、マリタン教授の文化哲学と歴史哲学の考察を筆者自身の立場から反省し直したエッセイに過ぎない」ものであって<sup>(8)</sup>、吉満のマリタン先生に宛てた架空の手紙、エッセイである。この小論が書かれる2年前にマリタンは『全きヒューマニズム』を出版している。フォルシェーによると、「この著作は、民主主義的でキリスト教的なタイプの新たな理想、しかも歴史的で具体的な理想を説くもの」であり、この著作によりマリタンは「世界的な名声を確たるもの」にした<sup>(9)</sup>。当時の欧米社会に大きな反響を呼んだこの著作を吉満は念頭に置いてマリタン先生への手紙を書き記したのであろう。

吉満は当時「世界史的な変動のただ中」にもかかわらず、その関心はやはり神学者らしく「国家の直接政治的政策的事柄ではなく、むしろ時代超越的な現実超越的な根本真理の問題」であった。手紙を読んでいこう。

今日の政治的歴史的諸事情が十九世紀までの、否なこの前の欧州大戦までのさまざまな国家的権力闘争と申しましょうか、とにかくそうした帝国主義的諸国家闘争の単純な性質のものでなく、(中略)もっと深い近代の思想的精神的な諸々の宿命的展開が織りこまれ、結局はヨーロッパのいわゆる近代的な精神革命と産業革命とが全地球にひろがって思想的にも政治的ないし経済的にももっと深い意味をもったものとなっております以上、世界共通の思想的精神的問題として純粋に理念的な反省をすることは、今日最も現実的なモラルの問題であるとともにはそれは全人類的な哲学的な問題であると存じます<sup>(10)</sup>。

吉満は今日の政治的社会的諸事情が19世紀までの、また第一次世界大戦までのような国家間の帝国主義的な闘争と考えていない。そこには近代的な思想的精神的で宿命的な展開がその深層に捉えなければならない。ヨーロッパの近代の精神革命、近代的なヒューマニズムは広がり、産業革命が工業化による近代的な都市が形成を促し、その結果、その風景、環境に中世社会とは大きな変化を及ぼしたのである。これらの革命は全地球に広まり、思想的にも政治・経済的にも深い影響力をもつものとなる。政治的社会的諸事情は、吉満にとって世界共通の思想的精神問題として純粋に理念的な問題であった。これを反省することとなり、最も現実的なモラルの問題、全人類的な哲学の問題として取り上げなければならない。

ではこの世界共通の思想的精神問題とは何であろうか。吉満は近代における人間中心的ヒューマニズムに反対する立場にある。

今日の政治の問題、経済の問題、総じて「社会」の問題が具体的にはコミュニズムとファシズムの思想的問題として人間精神の闘争となっているのは単に政治の表看板、政策の装飾のみではなく近代的思想革命の悲劇的宿命が物質的・生活的諸条件のうちいわば肉化し可視化されたものと理解すべく、先生の常に指摘される言葉をもってすれば人間中心の人間主義(humanisme anthropocentrique)の結論としての結局行動的なる「無神論」の弁証法的極

性を形成するものと言えるのではないのでしょうか<sup>11)</sup>。

吉満にとって、現実世界の政治や経済問題、そして「社会」の問題は、具体的に Kommunismus とファシズムという思想問題として人間の精神性への闘争となる。それは近代的思想がまねく危機、悲劇的な宿命として、物質的生活諸条件のなかに、じっさいに可視化したものであろう。そして、その根本的な原因と捉えられるのがマリタンの指摘するところの人間中心の人間主義の結論、つまり「無神論」である。

手紙のなかの「行動的な「無神論」の弁証法的極性の形成」とはやや難解であるが続けて、吉満はマリタンの言われたこととして、「デカルト的「分離主義」(séparatisme)なる思想的宿命は自己分裂と自己破滅の方向を全く弁証法におし進めてきた」として、人間の現世的自律主義を批判している<sup>12)</sup>。デカルト的「分離主義」、心身二元論的な思想は、人間の現世的自律主義、人間中心主義へと進み、自己肯定、自己承認ではなく、やがては自己神化へと昇華し、それが唯物的無神論につながるのである。さらには「全きヒューマンイズム」とは対極的な人格性破壊への悲劇につながると考えられよう。

吉満にとって、近代的な人間像は超克されなければならない。吉満の人間像は「近代の人間中心のヒューマンイズムに極的に対立する反ヒューマンイズム」ではなく、これはカトリシズムの宗教性に見いだされる場所の「神中心のヒューマンイズムないし充足的ヒューマンイズム(humanisme intégral)」である<sup>13)</sup>。それゆえに世界共通の思想的・精神的問題とは、近代における人間中心主義が及ぼした現世的な人間社会の危機へとつながる。まさに吉満の生きた時代は Kommunismus とファシズムという世界的な大きな争いの中にあつた。思想的・精神的問題は、現実問題として吉満やマリタンが挑んだ政治社会的問題の根幹となる。

## II. 精神の闘争

吉満にとって「歴史」、 「世界」 また「文化」の根本的問題は、「純理念的な最普遍的な人間精神性のミステールにかかわって一つの超歴史的な問い」であり、「歴史へのいわば超越的内在の関係となる人間性救済の真理への問いとなる」のである<sup>14)</sup>。現実には起こっている事象、歴史は「純理念的」、「最普遍的」な人間の精神の根源性に関わり、それが「超越的内在」である人間の救済、救いへの方向性を見る。次に日本における政治社会問題について、その思想精神性をどのように捉えているのだろうか。吉満の日本についての発言は決して数少なくはない<sup>15)</sup>。

特に日本の精神状況において考えねばならぬことは、先の哲学者たちの歴史哲学的な思索も含めてこの国の思想的実存状況とも言うべきものは西洋の場合のように常に対キリスト教的イデオロギーの立場となるのは異なつて、本質的にはキリスト教以前のギリシャの古代的立場であるとも考え得られるのでありまして、結局いわば仏教哲学的なあるいはインド哲学的な東洋思想の哲学的世界観の立場がむしろその世界観的形而上的地盤をなしていると思われるので、それにドイツ観念論の汎神論的思惟が新しい思惟方法となつて思考されているようなわけです<sup>16)</sup>。

日本は急速な近代化によって、西洋社会の文化思想を受け入れてきた。日本の精神、また歴史哲学的な思索を含めた日本の実存的な思想は西洋社会とは異なる。吉満は日本の思想を「対キリスト教的イデオロギー」の立場でなく、「ギリシャ的古代的」立場と考える。その世界観的形而上学的な基盤はむしろ「仏教哲学的あるいはインド哲学的なる東洋思想」にみている。そしてそれに「ドイツ観念論の汎神論的思惟」が加わったものとして捉えるのである。

続けて、吉満は日本の哲学的思惟、思想底流を「一種の生活感情的な汎神論的な自然と人間の調和」、「コスミックな世界感情」として、「そこが現代のプロブレマティック」であると認めている<sup>17)</sup>。吉満は具体的には「コスミックな世界感情」をあげてはいないが、アミニズム、八百万の神、また「山川草木悉皆成仏」などにみられる日々の生活感情であろうか。「一種の生活感情的な汎神論的」な自然観を基盤に、近代化によって多くの西洋哲学が輸入されたが、その中で影響を与えたものがヘーゲルを始めとするドイツ観念論であると吉満は捉えている。そこには西洋社会の中世のキリスト教思想はみられない。それゆえに日本にギリシャ的古代的なイデオロギーを見ている。

そして、当時の世界状況は戦争の渦中であつた。吉満の「歴史」、「世界」また「文化」根本的問題の本質は「ロシア的コミニズム的無神論や西欧的なさまざまの精神状況に見られる行動的無神論」と「近代資本主義的唯物論的人生態度」にある。日本においてはそれらの危機意識はそれほどの「悲劇的な性格」をもってはいないことを吉満は認めている<sup>18)</sup>。

日本における「純理念的な最普遍的な人間精神性の超歴史的な問い」に対して、吉満は「今日、一つの過去の伝統的世界観と政治的環境の力が及ぶ限り戦いつつさらに積極的にこれらを内面的に強め深めるための霊性の高揚」を求めていくのである。日本文化はもはや単に儒教的仏教的、日本性格的なものだけでは規定されておらず、真に人間的自然的な徳性も、キリストの福音の超自然的な恩寵によって「新しき文化創造の真に積極的進歩的展開」が望まれなければならないのである。そして、それは「新しき永遠の生命文化の創造」であり、これは決して「日本精神文化価値の否定ではなく永遠の高揚」である<sup>19)</sup>。吉満は深くキリスト教の超自然的恩恵の力による日本の精神文化の新たな創造を信じ、キリスト教の愛による祖国と同胞における使命を思う。

過去一千年余の日本精神文化における仏教のなした意味を聖徳太子や弘法大師、その他鎌倉時代前後の日本精神史上に永久に輝く幾多の偉大な宗教的天才の例についてここに思いあわせてみても、来たるべき世紀におけるキリスト教的靈魂の大いなる開花結実をまさに超自然的飛躍において考え見るとは私たち日本人にとって限りない希望の夢であり、神の摂理の今後の世界史的展開が過去の二千年間のそれに決してその奇蹟的賛美においてまさるともおとることなかるべきを思うものであります<sup>20)</sup>。

仏教は6世紀の中頃日本に伝来して以来、日本の思想、精神文化に多くの影響を及ぼしてきた。宗教的天才として聖徳太子や弘法大師、鎌倉仏教では、法然、親鸞、日蓮などをさすであろう。吉満はキリスト教的靈魂も日本の社会に開花結実することを望み、それを「日本人にとって限りない希望の夢」とする。神の摂理は、これまでの二千年間以上にまさるともおとることがな

い。その奇蹟的賛美を思う。それが日本の文化、魂の生命に与えられなければならない緊急の使命となる。日本の歴史的な実存には、超自然的なキリストの福音が急務であり、吉満自身にとって彼の思想が、形而上学的ではなく歴史的実存的な意味合いを含むこととなり、魂の意義につながるのである。

### Ⅲ. 時代の嵐と「決意」

1928（昭和3）年、東京帝国大学文学部を卒業後、3月に岩下壮一の義弟の高垣次郎とともにフランスに留学している。吉満はカトリック大学の哲学科で学び、ジャック・マリタンを師に仰ぐことになる。この頃フランスではアクション・フランセーズの暴動が高まり、その嵐が去ったばかりの「怒濤の痕跡、歴史の転換の印象の鮮やかなただ中」であったという。また、そこでの日常にふれた様子は次のように記されている。「古い何百年のドームと塔の下に、フランス革命の時代の嵐の中に迫害され、惨殺された幾多の修道司祭たちの「ここで殺されたり」と生まましき追憶をそそる文字を刻んだりしてある古い庭園を毎休憩時間に歩き、そして「ソヴィエト・ロシアの大使館の壁だというのをいつも目の前に眺めながら」、吉満はパリでの生活を送っていたという。日本を離れ、吉満は「生き生きとした学問への情熱が信仰的な実存的な意識と相合して燃えてくることを覚えた」のである<sup>21</sup>。当時24歳の若かりし吉満の熱い思いがそこにかいま見ることができる。そして怒濤のように混乱した社会、歴史的時間の中で吉満自身の学問信条を見いだす。

私は政治的社会的立場決定にかかわらぬ「真理探究」の静かないわば永遠の精神とかかる風土雰囲気はいかなる時代の激励の中にも保たれねばならず、それでこそ人間らしき生活また社会というものだと考える。がしかし私は学問的なないし信仰的世界観的な永遠的事柄へのむしろ研学時代などよりはより職業的真剣さと愛をもってする自己集中に甘んじて安んずる心のただ中に、かつての意味とは全然別な意味で、まさに「実践的なる限りにおいて実践的なる」自らの実践的可能的のための立場の「決定」ということが切実に考えられてきた<sup>22</sup>。

吉満は政治社会的立場にかかわらないところの「真理の探究」を追求する。その静かな永遠の精神、風土的雰囲気こそどの時代においても保つ必要性をもち、それが人間らしい生活、社会だと考える。しかし、吉満は研学時代などより、さらに職業的真剣さと愛をもって集中する中で、かつてとは全く別な意味を見いだしていく。それが「実践的なる限りにおいて実践的なる」、自らの実践的可能性のための立場の「決定」である。「実践的なる限りにおいて実践的なる」という限定の中で、自らの実践的可能性のための立場の「決定」は、半澤孝磨によれば、吉満自身は保守的オポチュニズムであることを強く否定していたというのがこれを「見事なオポチュニズムの表明」であり「現実への距離感を保つことによって、逆に現実に対する新たな積極性と責任の意識が生まれるという発想」とであるという<sup>23</sup>。

吉満には「永遠の真理との超越的事象への安心感」という真理への信頼がある。そこで自身の「決定」を「社会的歴史的実践の明白な屈託なき自己決定」に捉え、またそこに必然性を見

いだしている。そして、簡単に言えば「人は実践の領域においてはpartyを選ぶことをあえてし得なければならぬ」と決定づけるのである<sup>24)</sup>。

しかし、具体的に吉満の決定するところの実践の領域におけるpartyへの明確な宣言は述べられていない。この文章は1936（昭和11）年9月に『宗教思想』へ寄稿されたものである。留学帰国の7年後となるが、世界の社会情勢はますます混乱し、国内では2.26事件、海外ではスペイン内乱が始まった年である。

## おわりに

本稿では吉満における歴史的・社会的・政治的な思想を中心に考察してきた。もちろん吉満にとって、歴史社会の問題は、その共同体に属する個に着目し、個が「本来的に生き、自由創造性が秩序と伝統の約束のうちに真に価値のあるもの」となり、「単に「文化」の問題として客体的課題」ではなく、「それを可能ならしめる実存的主体の問題」にある。つまりは「魂の問題」が重要となる<sup>25)</sup>。超自然的な霊的秩序に吉満の思想は常に結びつけられていることは忘れてはならない。吉満のマリタン先生への手紙の最後の部分には次のように記されている。

目前の東亜の大陸において行われつつある厳粛なる犠牲の経験を通じて私たち同胞の心ある人々は「東亜を救う思想は世界を救い得る思想でなければならない」ということをいよいよ深く認識してきたのではないかと思います<sup>26)</sup>。

「東亜を救う思想は世界を救い得る思想でなければならない」という一文は、言うまでのなく大東亜共栄圏の侵略の理由、西欧社会による植民地支配、アジアの解放とは全く異なるものである。「これがなんらかの単なる政治的意味の世界主義や超国家主義などというものと同類の思想」ではない。「本来ヒューマニスティックなむしろメタフィジックな精神感覚の問題であり、やがてそこより超自然的な霊的秩序」につながる<sup>27)</sup>。西洋も東洋もその超自然的な霊的秩序は同様のものである。その秩序のもとへ恩寵を思うところの超自然的世界観に救済は求められる。したがって「東亜を救う思想は世界を救い得る思想」でなければならない、全世界的な幸福論につながる。

人間は宗教的霊魂主体としてそれ自身の神との永遠の愛の関連に立つことを認めざるところにおいて、人間的生はこの現世的社会関係において歴史的生の意義においてのみしか価値づけられないこととなるであろう。来世の超歴史的生につながる彼岸的精神性価値をそれ自身として認め得ないところに、やがて宗教的生の意義を見失うのみならず、この歴史的生自身の深き無限の魂をも見失うであろう<sup>28)</sup>。

吉満において、人間は宗教的霊魂主体であり、そこに神との永遠の愛の関連がなければ、その人間的な生は現実的社会関係において歴史的な生の意味しか見いだせない。それは宗教的な意味合いだけではなく、「深き無限の魂」を見失うこととなる。そこには魂の永遠の救いは絶

たれる。したがって吉満は「実践的なる限りにおいて実践的なる」という限定の中で、自らの実践的可能性のための立場の「決定」を霊的な永遠の真理、霊的な秩序に導かれ行わなくてはなるまい。

さて吉満の「マリタン先生への手紙」を読んできた。吉満の歴史哲学的な考察はヘーゲルの歴史哲学とはかけ離れたものである。近代西洋哲学について吉満はデカルト論をまとめており、それは「中世から近代への精神史の中でデカルト哲学に含まれる近代的傾向をカントやヘーゲルの中の傾向に結び、さらに遠く無神論的な唯物論や実証主義に及び、さらにまた虚無思想や人間神化の説にも及ぶ線が引かれる」ものである<sup>29)</sup>。吉満は近代哲学からの人間精神の破壊的危機を根本的に追究している。

それゆえに「近代の超克」は「自然学と形而上学との真理関係といふことが問題」になる<sup>30)</sup>。吉満は太平洋戦争が開始された翌年1942（昭和17）年に「近代の超克」知的協力会議の座談会に出席している。そこで吉満は西谷啓治との話の中で「キリスト教的観念、神の概念や、人間の概念が科学的知識と結びつき難い」という考えから「京都の先生方のいろいろお書きになるものの中に有神論的体系の克服—といふことを仰しやるので承服出来ない」と述べている<sup>31)</sup>。西谷は科学と宗教はそれぞれの立場からの追求であるため、吉満の「人間の宗教的実在の真理と科学的知性の探究」を「キリスト教において結びつき得る」と考える思考とは相容れないものである。話は平行線に終わっている。

京都学派で著名なヘーゲル研究者である田邊元について、また日本哲学自体において、「田邊や森瀧のように真摯に自己を追求しながら、おのずと思ひもよらぬ奈落の底に落ちていく仕組みがあるのではないか」との指摘がある<sup>32)</sup>。これについては本稿ではふれないが、西谷の論文に関係あるとして吉満は次のように述べる。

神の実在とかいふ問題と科学的立場は結びつかないといふ考へから、絶対的無といふ立場で宗教的真理を理解なさるのは一応論理は通りませう。然しヨーロッパで科学といふものが思想界を苦しめたのは、やつぱり人間の靈魂とか、神とかの宗教的真理を実在の真理として真剣に問題としたからだったので、無の論理ではこの悲劇は救われません<sup>33)</sup>。

神や宗教の問題と科学の立場を結びつけずに「絶対的無」から宗教的真理は理解することは論理的に可能だとしても、科学が人間の靈魂、神の宗教的真理は真剣に扱うことはできないと吉満は考える。そこに自然と形而上学の問題が生じ、自然に関する真理の探究が始まるのである。科学に対してもヒューマニスティックなメタフィジックな精神感覚の問題、やがてそこより超自然的な霊的秩序がなくてはならない。吉満にとって無の思想では近代の超克はできず悲劇になるのである。そこで自然としての人間だけではなく、神の子として形而上学的な存在としての人間性のロゴスを構想しなければ吉満の現実的な歴史的考察は理解しがたいであろう。

さて21世紀の現代社会において、世界の状況はどうだろうか。世界紛争、戦争の収束は戦禍による抗争となり、また、AIなどの技術革新は新たな情報革新へと広がり、時間空間概念が変化している。さらに環境問題、資本主義の限界、富の偏在、経済社会問題など多くの課題が認められる。吉満が生きた時代と現代では本質的な問題は変わらず、むしろ複雑化しているの



ではないだろうか。人間がどこから生まれ、何故死んでいくのか。それはこの歴史的な実存的空間や時間においてその答えは明確には出せない。古来より何か超越的なものへの憧憬は、宗教、芸術文化において常に追究されてきた。吉満は「魂の改悔」が近代の超克の第一条件であるという<sup>94</sup>。私たちは豊かな真理の追究をあきらめてはなるまい。

## 註

- (1) 吉満2022, 524頁。
- (2) 若松2014, 319-333頁参照。
- (3) 垣花1984, 497-498頁。
- (4) 鈴木2009, 144-150頁。
- (5) 赤江2013, 94-95頁。
- (6) 荒木2023, 361頁。
- (7) 半澤1993, 91頁。
- (8) 吉満1984 c, 124頁。
- (9) ドミニク・フォルシェー 2001, 337頁。
- (10) 吉満1984 c, 125-126頁。中略部分「その当時以来の経済的政治的近代機構の複雑な諸関係の錯綜のいよいよ発展した形態ないし段階の新たな闘争—つまり国家的民族的生存競争の物質的諸条件の交渉一般のうちに、」。
- (11) 吉満1984 c, 129-130頁。
- (12) 吉満1984 c, 130頁。
- (13) 吉満1984 b, 203頁。
- (14) 吉満1984 c, 134頁。
- (15) 半澤1993 c, 98頁。
- (16) 吉満1984 c, 143頁。
- (17) 吉満1984 c, 143-144頁。
- (18) 吉満1984 c, 143-144頁。
- (19) 吉満1984 c, 144-145頁。
- (20) 吉満1984 c, 145頁。
- (21) 吉満1984 d, 398頁。
- (22) 吉満1984 d, 399頁。
- (23) 半澤1993, 92-93頁。半澤は吉満のオポチュニズムを、その態度と気質において現実的革命家のものであると考えている。
- (24) 吉満1984 d, 399頁。
- (25) 吉満1984 b, 207頁。
- (26) 吉満1984 c, 148頁。
- (27) 吉満1984 c, 148頁。
- (28) 吉満1984 a, 132-133頁。

- (29) 渡辺1983, 496頁。
- (30) 河上・竹内1979, 194頁。
- (31) 河上・竹内1979, 197-198頁。
- (32) 山内2023, 5頁。
- (33) 河上・竹内1979, 195-196頁。
- (34) 吉満1984 b, 207頁。

## 文献表

赤江2013	赤江達也『「紙上の教会」と日本近代——無教会 キリスト教の歴史社会学』、岩波書店。
荒木2023	荒木慎一郎「訳者あとがき」, ジャック・マリタン (荒木慎一郎訳)『全きヒューマニズム 新しいキリスト教社会の現世的・霊的諸問題』、知泉書館, 359-365頁。
河上・竹内1979	河上徹太郎・竹内好『近代の超克』, 富山房。
垣花1984	垣花秀武「詩人哲学者、吉満義彦とその時代」(解説), 『吉満義彦全集第4巻 神秘主義と現代』, 講談社, 467-526頁。
鈴木2009	鈴木真美『戦後思想は日本を読みそこねてきた 近現代思想史再考』平凡社新書。
半澤1993	半澤孝磨『近代日本のカトリシズム』, みすず書房。
フォルシェ-2001	ドミニク・フォルシェー (菊池伸二・杉村靖彦・松田克進訳)『年表で読む哲学・思想小辞典』, 白水社。
吉満義彦2022	吉満義彦 若松英輔編『文学者と哲学者と聖者 吉満義彦コレクション』文春学藝ライブラリー, 文春文庫。
吉満1984 a	吉満義彦「宗教と文化の現象」, 『吉満義彦全集第1巻 文化と宗教』, 講談社, 66-139頁。
吉満1984 b	吉満義彦「近代超克の神学的根拠-いかにして近代人は神をみいだすか?-」, 『吉満義彦全集第1巻 文化と宗教』, 講談社, 182-166頁。
吉満1984 c	吉満義彦「マリタン先生への手紙-現代の歴史哲学的省察-」, 『吉満義彦全集第5巻 詩と愛と実存』, 講談社, 124-148頁。
吉満1984 d	吉満義彦「時代の嵐と「決意」」, 『吉満義彦全集第5巻 詩と愛と実存』, 講談社, 397-400頁。
山内2023	山内廣隆『愈々つまらぬ様なり-西田幾多郎から田邊元へ-』, ナカニシヤ出版。
若松2014	若松英輔『吉満善彦-詩と天使と形而上学』, 岩波書店。

渡辺1984

渡辺秀「吉満義彦のデカルト論」(解説),『吉満義彦全集第3巻 近代精神史研究』,解説、講談社,203頁。

